

---

# 哀しき愛

usa

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

哀しき愛

### 【コード】

N0237BA

### 【作者名】

Usa

### 【あらすじ】

彼とずっと一緒だと思っていた。

彼の一番近くにいるのは、私だと思っていた。

彼女が現れる前は…。

彼女さえ、いなければ。

彼女さえ、いなくなれば。

お願い、彼を返して…！

パラレルです。

新蘭ですが、一部新志な表現もあります。

暗い志保ちゃんは見たくないという方は**back**願います。

## 気持ち

私の名前は宮野志保。

一七歳、高校二年生。

家族はいない。

十年前、私の両親と姉は事故で亡くなった。

それ以来、私は遠縁の阿笠博士に引き取られて暮らしている。

博士は優しい人。

突然現れた私を、何のためらいもなく受け入れてくれた。

時々変な発明とかしたりするけど、私にとっては父のような存在。

でも、どこか違うのを感じていた。

私と博士には、やはり何か壁のようなものがある。

本当の親子ではないんだから、当然といえば当然だけど。

少し、寂しい。

それでも私は、ここが好きだった。

風変わりな老人の家、隣には大きな洋館。

小学校には銀杏並木があり、秋になるとそこをよく通って帰っていた。

隣にいるのは、サッカーボールを蹴っている彼。

リフティングに百回成功したと言って、彼は私に向かって、歯を見せて笑っていた。

私は呆れながらも、笑みを返した。

こういう時間が、何よりも幸せ。

博士といるよりも、学校で本を読んでいる時よりも。

私の大切な時間。

大切な彼。

私の…好きな人。

キラキラした笑顔が好き。

少し子供っぽいところが好き。

何もかもお見通しだっという表情が好き。

彼の全てが、好き。

私と彼、工藤新一は幼馴染。

私が米花町に来たばかりの頃、隣に住んでいる彼は、気さくに私に話しかけてくれた。

最初は別に、なんとも思ってたなかった。

ホームズ、事件、サッカー好きの、ちょっと変わった男の子。

それぐらいにしか思ってたなかった。

私の彼に対する気持ちが変わったのは…そう、中学一年の六月。

帰る頃になって、突然雨が降り出した。

私はその日、傘を持っていなかった。

昇降口で雨がやむのを待っていると、私の前に、青い傘が差し出された。

「ほらよ。これ使えよ」

工藤君はそう言って、私に傘を持たせた。

そのまま一人で走り出した彼を見て、私は別の傘はあるの？と声をかけた。

「バ―口。オレは探偵だぜ？こういうことは想定済みだよ。ちゃんここに、折り畳みの傘が入ってたんだよ」

バッグを得意気に叩く。

「そう…。なら、借りてくわよ」

「おう。オレ寄るところあつから、じゃあな！」

しばらくして私は気付いた。

彼、昨日折り畳みの傘壊れたって…。

次の日、彼は風邪をひいて学校を休んだ。

呆れる半面、嬉しかった。

自分よりも私のことを思ってくれたことを。

この日から、私は彼に夢中になっていた。

例え幼馴染でも、彼の一番近くにいるのは私。

これから先も、ずっと。

そう思っていた。

気持ち(後書き)

私パレル好きだな…。

これからよろしくお願いいたします> | | ( | <



## 日常

朝、博士が起きる前に私は目覚める。

今まで自炊していたのが嘘みたいに、料理が苦手な博士。

今では家事は、私の担当。

キッチンに立って、朝食の支度を始める。

卵を三個取り出した。

なぜ三個なのかは、今にわかる。

卵を割って目玉焼きを作っていると、チャイムの音が鳴る。

普通だったら、こんな朝から…と思うけど、ここでは至っていつものこと。

私は急いで玄関に向かった。

「おっす」

「朝から元気ね」

寝癖も直さないままに、工藤君はずかずかと上がり込む。

その無防備な様子も、私にとっては愛しい。

「博士は？」  
「まだ寝てるわ」

そんなことを言っていると、上の方から物音がした。

博士が欠伸をしながら降りてきた。

あゝあ、あんなにお腹が出ちゃって…。

そろそろ本格的に、カロリー制限させなくちゃね。

「はよ、博士」

「ん？ああ…新一君か。今日は早いの」

「今日はサッカー部、朝練あるんだってよ」

それを聞いて、私は不思議に感じた。

「あなた、部活はやめたんじゃない？」

「そのつもりだけどよ…中道が今度の大会だけでもって言うからよ」

そう言うと、彼はテーブルに置いてあった紅茶を勝手に飲んだ。

「じゃあねえから、その試合だけ出てやめる」

「きつとその次まで、ってくるわよ」

「断るよ、その時は」

どうかしら、と私は呟いた。

でも、彼には部活をやめてほしくなかった。

サッカーをやっている時の彼は、すごく楽しそうだから。

「はい、できたわよ」

「サンキュー」

目玉焼きとソーセージ、トーストを二人の前に置く。

練習があるからか、工藤君はがつついて食べていた。

「もう少し落ち着きなさいよ」

「そうじゃぞ。せつかく志保君が作ってくれたご飯を…」

だけど、彼はさっさと食べ終わって、紅茶でトーストを胃に流し込んでいた。

「わあってるよ。んじやな。先行くぜ、宮野」

「はいはい」

あの髪で行く気がしら…。

多少の不安は残るけど、私は手を振って見送った。

至って普通の朝。

こんな普通の毎日が続いていくに違いない。

彼と博士にご飯を作って、彼を見送って、自分も学校に行って…。

一緒に帰って、買い物に付き合ってもらったり、少し寄り道をした  
り。

またご飯を作って、興味もない事件の話が聞かされて。

そんな日が続いていくと思っていた。

彼女が現れるまでは。

## 転校生

工藤君が出ていった後、私は一人で学校に向かう。

正直に言って、私には友達と呼べる人は少ない。

この性格だし…ね。

教室のドアを開けると、一瞬だけ視線が集まる。

私だとわかると、皆おしゃべりを再開させる。

私は自席に向かうと、バッグを置いて、隣に向かっておはようと言った。

「おはよ、宮野さん」

鈴木さんは笑うと、また他の子と話しはじめる。

鈴木園子さんは、わたしと話してくれる、数少ないクラスメイトの一人。

大体の女子は、私が工藤君と仲が良いからと、勝手に憎んでいる。

私に対する陰口が少なくないことも知っている。

まあ、言いたい人は言っていれば良いわ。

「ねえねえ聞いた？今日は転校生が来るらしいよ。しかも女子の！」

他の女子が話しているのが聞こえてきた。

「へへえ、どんな子だろ」

「さあ。美人かな？」

「優しい子だといいね」

興味はないわ。

私は本を取り出すと、しおりが挟んであるページを開いた。

しばらくすると、ドアが開いて、サッカー部の部員が入ってきた。

私はチラッとそちらを見て、工藤君の姿を確認した。

「おい、何盛り上がったんだよ？」

中道君が女子の話題に割り込んでいる。

「今日、転校生が来るんだってさ」

「何？女か？」

「そうだって」

すると、相沢君まで面白がって加わった。

「美人か？」

「知らない」

「可愛い子だったらアタックしてみるか」

「無理無理！」

クラス中がワツと笑いに包まれた。

やがてチャイムが鳴って、担任が後ろに、別の学校の制服を着た女子を連れて入ってきた。

男子がざわめいたのがわかる。

「毛利蘭といいます。よろしく願いします」

毛利さんは大きな目を皿のようにして笑った。

長い黒髪がふわっとなびいた。

美人

この一言がびったりな人だった。

でも嫌みがない。

優しげな顔をしていて、女子もすぐに好感の目になった。

でも…彼は違うわよね。

私はそっと、斜め後ろの席の工藤君を盗み見た。

だけど、なぜかしら。

工藤君が一番、彼女を真剣な目で見ている気がする。

気のせい…よね。

だけど、私の考えは違っていた。

毛利さんは工藤君の隣の席。

つまり、私の後ろ…。

彼女は、席に座る直前に、小さな声で言った。

「久しぶりだね。新一…」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0237ba/>

---

哀しき愛

2012年1月2日08時48分発行